

特集 巻頭インタビュー

子どもの時の 失敗経験が、 生きていく力を育む。

東京大学 社会科学研究所助教授

Yuji Genda

玄田 有史 先生

東京大学社会科学研究所が手掛ける「希望学プロジェクト」の代表であり、ニートの研究にも積極的に取り組まれている玄田有史先生。今回は、これからの時代に子どもや若者が前を向いて生きていくためには何が大切なのか、専門分野である「希望学」の見地から語っていただきました。

〈略歴〉

平成2年、東京大学経済学部卒業。
同大学大学院経済学研究科第II種博士課程中退、ハーバード大学客員研究員、オックスフォード大学客員研究員、学習院大学経済学部教授を経て、平成14年4月より東京大学社会科学研究所助教授に就任、現在に至る。
『14歳からの仕事道』（理論社）、『仕事のなかの曖昧な不安』（中公文庫）、『希望学』（中公新書ラクレ）など著書・共編書多数。

先生は「希望学」を研究されていますが、なぜ希望について調べようと思われたのですか？

今の時代、とくに日本の若い人たちが「希望がない」って言いますよね。そういうことを聞いて、ふと「じゃあ、なぜ希望が持てないんだろ

う？」と思ったんです。確かに昔と比べると、今は希望を持ちにくい時代なのかもしれません。私たちの若いころは、素朴な気持ちで「野球選手になれたらいいな」と思えたのが、今はたくさん情報がある分だけ、そう簡単に思えなくなっています。仮に「希望がない」ということが本当だとすれば、それを良い・悪いで決めつ

けるのではなく、「じゃあ、なぜ希望が持てないのか？」「持った方がいいのか？」「どうすれば持てるのか？」といった事実を追究する必要があるのではないかなと。若い人に限らず、日本人がこれからの時代を前向きに生きていけるようにするためにも、そうした事実から得た研究情報を世の中に提供し、社会に貢献できれ

ばという気持ちがあったんです。

「希望」と「目標」では、少し意味が違ってくるのでしょうか？

難しい質問ですね（笑）。まず希望について言えば、すぐにかなうものと実現が困難なものがあります。食堂で注文するとき大盛りを



希望する。これは、すぐにかなう希望です。一方で「女優になりたい」と希望すれば、家でテレビばかりを見ているだけではかきません。女優をめざしたその日からオーディションに応募し、落ちても落ちてもがんばって受け続ける。そうした自らの行動で、人とかかわったり、誰かに支えられたりする要素があるものを私たちの研究グループでは希望と考えたいのです。

そういう意味で言う目標も同じかもしれませんが、あえて区別すると、「目標」は数値的に達成すると終わるもので、私が研究している「希望」とは、かなえられるかどうかかわらないけれど、かなえるために自ら行動しているものだと考えています。

子どもが希望を持つことと、親や友人とのかかわりには何か重要な関連性がありますか？

アンケートで「どういう人が希望を持つ傾向があるのか?」、逆に「希望を持たない人はどういう人なのか?」を調べたところ、友達の多い人は希望を持ちやすいという結果が出てきました。あとは、小さいときに家族から期待された記憶がある人も希望を持ちやすい傾向があります。とくに家族は、子どもにとって社会で一番自分に近い存在です。本人に最も影響を与えるのは親であり、友人であるんですね。

一方で、そういう結果を紹介すると「最近の子どもがダメになるのは、親がかかわりすぎたり、期待しすぎるからではないか」という声も聞かれます。私はニートの研究も行なっていますが、親が子どもにかかわろうとせず、まったく期待もしない家庭が現実にならざるやあります。そういう状況で子どもが生きていくのは、本当につ

らく、難しいことです。これは、家庭に限らず社会でも同じです。どんなにしんどい仕事でも、会社の中やまわりに期待してくれる仲間や上司、お客さんがいれば、自分の存在に自信が持て、行動する力がわいてくるのです。

では、子どもに期待をかけて育てるのは良いことなんですね。

確かに期待をかけるのは大事ですが、期待にも“かけ方”があります。何でもかんでも最初からべったり期待されると、子どもも困ってしまいますよ。だからといって、初めから「期待しすぎるのは良くない」と言い切るのはやはり違うと思います。

例えば、「いい先生」と呼ばれる教師がいますが、教室で30人ぐらいの生徒を教えているときに、全員が「私のことを一番見てくれるわ」と勝手に思うこともありますよね。本当は、先生はそういう目でみんなを見ていないのかもしれませんが、ある種のうまさで生徒をいように勘違いさせる。それは、いわゆるテクニックではなくて、「キミをちゃんと見てるよ」という先生の光線の出し方が上手だからなんです。子どもに期待をかけるときは、親も、このような“いい塩梅”の部分が大事ではないでしょうか。確かに、親が子どもをほめたり、はげましたりするのは非常に難しいことです。言葉でほめたり、モノを与えて評価することもあるでしょうが、子どもは案外、目でほめられるのがうれしかったりするので。

あと、「がんばれ」という言葉のかけ方ですが、今はうつ病などの問題があるから、すぐに「がんばれ」と言わない方がいいという風潮もありますけど、言ってあげた方がいいケースはちゃ

んとあります。それは、その人が今やっていることに対し、やり続けることがまさに大切だとわかるときです。勉強を例にあげると、模試やテストの結果がよく、今のまま努力し続ければ志望校に合格できるという場合、子どもに「この調子でがんばれよ」と声をかけてあげる。恥ずかしさで「うるさいなあ」と言われるかもしれないけれど、本人はまんざらでもなく、さらにはがんばって成績を伸ばすことはよくあります。逆に「自分は大学に行きたいのか? それとも専門学校に行きたいのか? 本当はミュージシャンになりたいのか?」と迷っているようなときには、ただうとうとうしく思われるだけです。

期待を受けて成長していても挫折することはあると思いますが、軌道修正できるようになるためにはどのような教育が大切ですか？

単純に言うと、子どもには、上手にたくさん失敗を経験させてあげることです。「希望学」の研究データによると、中学時代になりたかった職業に就ける人は、わずか13~15%しかいません。つまり、多くの人は希望をかなえられず挫折することになります。そこから自分自身をどう修正していくかが大事なのに、失敗や挫折から大きなショックを受ける人もいます。ニートの若者たちを見ていると、やはり失敗経験が足りないために、就職活動の失敗で心にダメージが残ってしまうケースが多いのです。まわりから見ると何でもないことでも、失敗の経験が少ない本人にとっては苦しいのです。だから、失敗経験をさせることは大切な教育の一つだと思います。学校の勉強に限らず、スポーツでもいいし、お手伝いでもいい。とにかくちゃんとし



た失敗を適度にさせてあげるのが、本当の教育者でしょうね。そうした失敗を重ねることで、次に自分がどう振舞えばいいかが見えてきますから。

それと、失敗して挫折したときに、まわりがどう声をかけるかで、その本人の軌道修正のあり方も変わってきます。例えば、野球選手をめざしていた子どもが夢を断られたとする。そのときに身近な人が「野球なんてそんな無理なことばかり言って。ちゃんとサラリーマンになりなさい」などと言ってしまうと、もう野球への道は閉ざされてしまうでしょうし、本人の気持ちの切り替えにも時間がかかるかもしれません。でも、肯定的に「あなたは本当に小さい頃から野球が好きだったよね。確かに野球選手にはなれなかったけれど、野球が好きだという気持ちをかなえられる道をもう一度一緒に考えてみようよ」と言ってあげると、野球選手にはなれないけれど、好きな野球に携わって生きていく道は開ける可能性はありますよね。要は、そういった言葉を大人がかけてあげられるかどうかなのです。

先生が著書で言われている「ワケわからん」をあきらめない、とはどういうことでしょうか？

生きていると「ワケわからん」と感じることはたくさんあります。でも、その「ワケわからん」に出会ったときにあきらめないことがとても大事だと思っています。例えば、社会に出ると「ワケわからん」ことだらけですよ。お客さんの言っていることも、上司の言っていることも、無理難題でわけがわからない。でも、わからないことを前にして、逃げずにじたばたしていると、「あっ、わかった」というチャンスは必ずやって来んです。それが、妙に要領ばかり良すぎて「わからないから放っておいて次にこう」と簡単にあきらめてしまうとチャンスも逃げていく。

中学や高校で何のために勉強しているかという、将来の「ワケわからん」に慣れるためです。先生の言っていることがわからないのは、先生もわざとわからないように教えているんだ、と講演会などでは冗談で言うこともあります。生徒は勉強が「わからない」「つまらない」と思いながらも、ほとんど毎日学校に来ますよね。大したものですよ。それができれば社会に出たとき大丈夫です。逃げ出さずに、学校に通い続けることで「ワケわからん」をあきらめない練習がしっかりできていますから。

今の中学生や若い人は、先生の目にどう映っていますか？

根本的なところは、今も昔も大きく変わらなと思います。でも、ニートの問題などを見ると、昔より今の時代を生きる若者の方が大変

でしょうね。やはり情報がたくさんある社会で生きていくのはしんどいですよ。うぬぼれられないし、身のほど知らずにもなれない。所詮、自分にはムリだって早い段階でわかってしまう。「女優になりたい私って、無茶だよな…」と、良いか悪いかは別にして、すぐに冷めてしまう。

大学で学生たちを見ていると、今の若者はとても繊細だという気がします。その理由はよくわかりませんが、小さいころからいじめの問題があったり、親が離婚することも当たり前の家庭や社会が身近にあると、幼いなりに子どもはどこかで意識するので、人間関係に気を使いながら成長してしまう。そういった影響で繊細な若者が増えているのかもしれない。

でも私は、そういう子どもたちが劣っているとはまったく思いません。繊細な子どもはニートになりやすい傾向はありますが、一つよい方向に向かえば人気者にもなれるし、きっとモテると思う。私が学生のころは、「高学歴・高所得・高身長」のいわゆる3高がもてはやされた時代でした。でも今は、内面的な人間性のよさが重視される時代です。繊細な若者は、人に言われたくないようなことは絶対に言わないし、歩み寄る必要があるときは、自分からそっと歩み寄る。昔にはなかなかいなかった、すごく優しい若者です。ですから、大人もそういう面をちゃんと見て、期待をかけてあげないといけないですね。

保護者が子どものためにやってあげられることはありますか？

よく言っていますが、大人が子どもに示すこ

とで一番大事なものは「自分の人生をちゃんと充実させる」ことに尽きるのではないのでしょうか。子どもにとって最も身近な親が、良くも悪くも大人のイメージになるわけですから。その親が「人生はつまらない」という顔をして生きていたりすると、子どもも「そうか、人生ってつまらないんだ」と思いますよ。確かに、社会で生きているとつらいことは多いでしょうけど、「人生って、悪いこともあるけど、良いこともいっぱいあるんだよ」ということを言葉や表情で子どもに見せてあげないと。子どもにとにかく言う前に、まず自分の人生が充実しているか、充実しているように見えているかを、親が本気で考えないと子どものためにもならないと思います。

東京大学 社会科学研究所助教授 玄田有史先生の本をプレゼント



【お子さまにおすすめ】

『14歳からの仕事道』
理論社・刊
20名様
将来、じぶんはどうなるの？
働くって、どういうこと…？
この本には、「キャリア」という
コトは出てきません。
でも、そんな疑問や不安に
とことん向き合うための、
本当のキャリア教育の本です。



【保護者の方におすすめ】

『仕事のなかの曖昧な不安』
中公文庫・刊
20名様
「働く」ことにつきまとう
曖昧な不安に対し、
今、一人ひとりに出来ることは…。
揺れる時代と冷静に
ファイトするための
リアルなヒントあふれる一冊です。

アンケートにご協力いただいた方の中から抽選でそれぞれ10名様×2回(計40名様)に玄田有史先生の著書を進呈いたします。くわしくは、本冊子32ページをご覧ください。